

## トルクメン語の必要性を表す二つの形式

日高 晋介

(筑波大学)

### 1. はじめに

本発表では、トルクメン語の必要性 (拘束的モダリティ「～しなければならない」) を表す二つの形式 (1. 義務形 *V-mAll*、2. *V-mAk(IIk) gerek* [V-VN necessary]) を取り扱う。意味の観点での問題点として、チュルク諸語全般の研究書である Johanson (2021: 705) は拘束的モダリティと認識的モダリティの間に曖昧性があるとしているが、トルクメン語文法書では上記の二形式が認識的モダリティを表すかどうかについて記述がないことが挙げられる。次に、形式の観点からの問題点を述べる。Coates (1983: 244) は「認識的モダリティ不可侵性の原理」を提唱している。これは、英語の認識的モダリティを表す法助動詞を用いた文において、否定・過去・条件が主陳述 (=命題内容) のみに作用するという原理である。上記のトルクメン語の二形式が認識的モダリティを表すのであれば、否定・過去・条件が主陳述のみに作用するはずであるが、先行研究ではそのような情報がない。本発表では、母語話者への翻訳調査ならびに作例の許容度調査を通して、上記の意味と形式の問題点を解決することで、トルクメン語の必要性を表す二つの形式の差異を明らかにする。結論として、*V-mAk(IIk) gerek* は認識的モダリティを表せないが、*V-mAll* はどちらとも表せると述べる。

本発表の構成は次のとおりである。2 節では先行研究を概観したのちに問題を提起し、3 節では母語話者への調査について述べる。最後に、4 節では 3 節で述べた調査で得られた結果をもとに結論を述べ、今後の課題を述べる。なお、本発表における例文・日本語訳・グロス・例文中の装飾 (太字、下線) は発表者による。

### 2. 先行研究

2.1 節でトルクメン語文法書における記述を概観し、2.2 節でモダリティの観点から問題提起を行う。

#### 2.1. トルクメン語文法書における記述

トルクメン語 (チュルク諸語南西語群) には、必要性 (拘束的モダリティ「～しなければならない」) を表す形式が二つ存在する。一つは義務形 *V-mAll* である。トルクメン語では、基本的に動詞屈折接辞の後に、主語の数・人称に一致する接辞および接語が付くが、義務形 *V-mAll* には付かない。(1) では、主語が人称代名詞 *Men* 「私」によって示されており、*et-meli* 「しなければならない」には何も付いていない。

(1) *Men bu iş-i et-meli.*

1SG this work-ACC do-OBLG

「私はこの仕事をしなければならない」 (Clark 1998: 294)

*V-mAll* は形動詞としても機能する。(2) では、*bejer-meli* 「修理すべき」が *kätmen-iñiz* 「あなたの鋏」を修飾している。これ以降、本発表では形動詞として機能する *V-mAll* は取り扱わない。

- (2) *Ene bejer-meli kätmen-iñiz bar bol-sa, getir-i+ber, men bejer-ip*  
 again repair-PTCP.OBLG hoe-2PL.POSS existent be-COND bring-CVB+give 1SG repair-CVB  
*ber-er-in.*  
 give-FUT-1SG

「また修理すべき鋏があれば、持ってきてくれ、私が直す。」(Baskakov et al. 1970: 306)

先行研究では *V-mAll* 自体に付く形式あるいは *V-mAll* の後に続く形式について言及があるので、ここで述べておく (2.2 節で再度述べる)。否定は、先行研究 (Baskakov et al. 1970: 306-307, Clark 1998: 296<sup>1</sup>) によれば、*V-mAll* の後に否定小詞 *däl* を続けることで表される。この否定方法は、モダリティの否定と主陳述 (=命題内容) の否定のどちらとも表す。(3) の *däl* は必要性を否定して「必要はない」ことを表している。一方、(4) の *däl* は主陳述を否定して「しないことが必要である=してはならない」を表している<sup>2</sup>。

- (3) *Wagtlayyn hökümet-i bir weç-den golla-maly däl!*  
 temporal government-ACC one condition-ABL support-OBLG NEG  
 「臨時政府をいかなる状況からも支持する必要はない」(Baskakov et al. 1970: 307)

- (4) *Ol it-i bir minut=da ýaşa-t-maly däl.*  
 that dog-ACC one minute=EMPH live-CAUS-OBLG NEG  
 「その犬を一分も生かしてはならない。」(Baskakov et al. 1970: 307)

疑問詞疑問文にも極性疑問文にも *V-mAll* は用いられる。(5) では、前半部に疑問詞 *näme* が用いられており、後半部には *V-mAll* に疑問 =*mi* が付されている。

- (5) *Indi men näme et-meli? Yzy-m-a öwrül-ip, salam ber-meli=mi?*  
 now 1SG what do-OBLG back-1SG.POSS-DAT turn-CVB greeting give-OBLG=Q  
 「今私は何をすべきか？振り返って挨拶すべきか？」(Clark 1998: 294)

過去は、先行研究 (Baskakov et al. 1970: 307-308, Clark 1998: 296) によれば、*V-mAll* に =*dI* (<過去小詞 *idi*) を続けることで表される。(6) では、各文の *V-mAll* に =*dI* が続いて必要性の過去が表されている。

<sup>1</sup> *V-mAll* は、動名詞 *-mA* と形容詞派生 *-II* 「～持ちの」の合成であり、形容詞派生 *-II* 「～持ちの」を *-sIz* 「～なしの」に置き換えることでも否定を表せる (Baskakov et al. 1970: 306, Clark 1998: 296)。ただし、この否定方法のほとんどは、形動詞として用いられる場合に見られる (Baskakov et al. 1970: 306)。

<sup>2</sup> (3) と (4) の日本語訳は Baskakov et al. (1970: 307) による露訳(‘Не надо поддерживать Временное правительство ни в каком случае!’ と ‘Не дать жить этой собаке ни одной минуты!’) による。

(6) *Aýal-y kesellä äňet-meli=di, on edi ýaşan Akjagül-den*  
 wife-3.POSS sick.person look.after-OBLG=PAST ten seven years PN-ABL

*göz+gulak bol-maly=dy, on dört ýaşly Durdumyrad-a gara-maly=di.*  
 eye+ear be-OBLG=PAST ten four years PN-DAT look.after-OBLG=PAST

「彼の妻は病人を世話しなければならなかった、17歳のアキャギュルの世話をしなければならなかった、14歳のドウルドゥムラドの世話をしなければならなかった。」(Baskakov et al. 1970: 308)

未来は、*V-mAll*に *bol-*「なる、である」の不確定未来形 *bol-ar*を続けることで表される (Clark 1998: 296)。

(7) では、*gel-meli*「来なければならない」のあとに、*bol-ar=syň*「君は～でしょう」が続いている。

(7) *Her niçik bol-sa=da gel-meli bol-ar=syň.*  
 every how be-COND=even come-OBLG be-FUT=2SG

「どうであっても、君は来なければならないでしょう。」(Clark 1998: 295)

仮定は、*V-mAll*に *bol-*「なる、である」の条件形 *bol-sa*を続けることで表される (Clark 1998: 296)。(8)

では、*bar-maly*「行かなければならない」のあとに、*bol-sa*「君は～でしょう」が続いている。

(8) *Eger bar-maly bol-sa, til kak-ar=syň.*  
 if go-OBLG be-COND tongue wave-FUT=2SG

「もし(彼女が)行かなければならないなら、君は電話をするだろう。」(Clark 1998: 296)

さらに、*V-mAll*に疑問=*mi*・確認=*dIr*を付けたり、証拠性 *eken*も続けることができるという (Baskakov et al. 1970: 307-308)。なお、先行研究 (Baskakov et al. 1970, Clark 1998) には、義務形 *V-mAll*の動詞語幹 *V*に何らかの接辞を続けて否定・テンス・仮定を表せるかどうかについての情報はない。

もう一つの必要性を表す形式は *V-mAk(ilk) gerek* [V-VN necessary] である (Baskakov et al. 1970: 305-308, Clark 1998: 306-307)。Clark (1998: 306) は *V-mAk gerek* は *V-mAkilk gerek* に等しいと述べ、*V-mAk*に主語の数・人称に一致する所有人称接辞が付くと述べている。

(9) *Galla biz-in öz-ümüz-inki: ony hökman payla-ş-mag-ymyz gerek!*  
 grain 1PL-GEN own-1PL.POSS-thing 3SG.ACC definitely share-RECP-VN-1PL.POSS necessary

「穀物は我々自身のものである:それをきっぱりと分け合わなければならない!」(Clark 1998: 307)

なお、*V-mAll*のように、それ自体に付く形式あるいは後に続く形式についての記述はなく、*V-mAk(ilk)*の動詞語幹 *V*に何らかの接辞を続けられるかどうかについても記述がない。

## 2.2. モダリティの観点からの問題提起

本節は、意味の面ではチュルク諸語全般の研究書の記述をもとに、形式面では英語の法助動詞に関する研究をもとに、トルクメン語の必要性を表す形式における記述について問題を提起し、本発表の調査目的について述べる。

まず、意味の面から問題提起を行う。Johanson (2021: 705) は拘束的モダリティと認識的モダリティの間には曖昧性があるとし、トルコ語 (チュルク諸語南西語群) *-mAll* の例 (10) を挙げている。(10) は二つの読みが可能である。(10) の英訳に示したように、「アリは寝なければならない=アリにとって必要な(正しい) 行動は寝ることだ」という拘束的モダリティの読みも、「アリは寝ているに違いない=アリが寝ていると結論付けなければならない」という認識的モダリティの読みも、どちらとも可能である。

(10) *Ali uydu-malı.*

PN sleep-OBLG

‘Ali has to sleep.’ = ‘The necessary (correct) action for Ali is to sleep’

‘Ali is most likely to sleep’ = ‘It is necessary to conclude that Ali is asleep’

(Johanson 2021: 705)

風間 (2021: 468) にトルクメン語の *V-mAll* が認識的モダリティを表している例 (11) が存在する。この場合は形動詞過去 (*maşyn döw-ül-en* 「車が壊れた」) に *bol-* 「である、になる」の義務形 *V-mAll* を続けることで主陳述が過去であることを表している。

(11) *Olar entek gel-enok, ýol-da maşyn döw-ül-en bol-maly.*

3PL yet come-NEG.PRS way-LOC car break-PASS-PTCP.PAST be-OBLG

「彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。」(風間 2021: 468)

したがって、主陳述に時制を作用させたい場合、形動詞に *bol-* を続ければよい。他方、2.1 節に挙げたトルクメン語文法書の記述からは *V-mAk(ilk) gerek* が認識的モダリティを表せるかどうか定かではない。拘束的モダリティを表す形式「～しなければならない」と認識的モダリティを表す形式「～にちがいない／～はずだ」が異なる日本語を媒介にして翻訳調査を行い、両形式が認識的モダリティを表すか否かを確かめる必要がある。

さらに、拘束的モダリティにも参与者内必要性と参与者外必要性の二種類が存在するため (Van der Auwera and Plungian 1998: 80)、これらの使い分けもあるのかについても検証する必要がある。参与者内必要性とは、事態に関与する参与者の内部にある必要性を指す (例えば、*Boris needs to sleep ten hours every night for him to function properly.* 「ボリスが適切に機能するには毎晩 10 時間寝ることが必要である。')。一方、参与者外必要性とは、その状態に関与している参加者の外部にあり、この状態を必要としている状況を指す (例えば、*To get to the station, you have to take bus 66.* 「駅に着くには 66 番バスに乗らなければならない。')。

次に、形式の面から問題提起をする。英語の法助動詞の研究において、認識的モダリティでは否定・過去・条件が主陳述 (main predication) のみに作用するという「認識的モダリティ不可侵性の原理」が提唱されている (Coates 1983: 244)。(12) に示した「認識的モダリティ+否定」では、否定が法陳述 (modal predication) ではなく主陳述に作用している。

(12) Epistemic modals + Negation

	Modal Predication	Main Predication
I MAY not do x I MIGHT not do x	it is possible that	I will <i>not</i> do x
I WON'T do x I SHALL not do x		
it SHOULDn't be x it OUGHTn't to be x	it is predictable that	I will <i>not</i> do x
	I assume that	it won't be x

(Coates 1983: 238)

Jenkins (1972: 96)によれば、条件節内に認識的モダリティを表す法助動詞は現れないという。これは、Coates (1983: 238)が指摘するように、モダリティに仮定的な意味が現れないことに矛盾しない。(13)の仮定の文では、法陳述ではなく主陳述に仮定的な意味が現れている。

(13) Epistemic	Modal Predication	Main Predication
if w were x, y MIGHT z	it is possible	that y <i>would</i> z
if w were x, y WOULD z	it is predictable	that y <i>would</i> z

(Coates 1983: 238)

(14)の「認識的モダリティ+過去時制標示」でも主陳述が過去を表している。

(14) Epistemic Modals + Past Time Marking

	Modal Predication	Main Predication
he MUST have come yesterday	'I confidently infer	that he <i>came</i> yesterday'
he MAY have come yesterday	'it's possible that	he <i>came</i> yesterday'
he MIGHT have come yesterday	'it's possible that	he <i>came</i> yesterday'
he COULD have come yesterday	'it's possible that	he <i>came</i> yesterday'
he WILL have come yesterday	'I predict	that he <i>came</i> yesterday'
	'it's predictable	that he <i>came</i> yesterday'

(Coates 1983: 241)

(12)~(14)より、*V-mAll*と*V-mAk(lik) gerek*が認識的モダリティを表すなら否定・過去・条件が主陳述のみに作用する、と想定される。しかし、2.1節で挙げた先行研究ではそのような情報はない。1.2節に挙げたトルクメン語の先行研究では、*V-mAll*についてはそれ自体に付く形式あるいは*V-mAll*の後に続く形式の言及はあった。1.2節では、否定((3), (4))・過去(5)・仮定(8)の例を挙げた。ただし、これらはいずれも拘束的モダリティを表している例である。*V-mAll*が認識的モダリティを表している例は、上記の(11)を参照されたい。(11)では主陳述が過去を表している。一方、*V-mAk(lik) gerek*についてはそのような情報は特になく、したがって、*V-mAll*と*V-mAk(lik) gerek*の動詞語幹*V*に否定・過去を表す要

素を付して<sup>3</sup>、母語話者にそれが許容されるかどうか、許容するとしたらどのような意味を表すかについても調査する必要がある。

### 3. 調査

本発表では、二種の母語話者調査を行うことで上記の問題を解決し、両形式の差異を明らかにする。まずは両形式がどのモダリティ的な意味を表すのかという点を明らかにする。さらに、作例した用例の許容度調査を行い、両形式の前後に否定・過去を表す形式が位置しうるのか、位置しうるとしたらどのような意味を表すのかについても明らかにする。調査協力者はトルクメン語母語話者の男性で、1991年マリ州出身である。

#### 3.1. 意味に注目した調査—翻訳調査と作例の許容度調査

まず、インフォーマントに以下の3文(参与者内必要性(15)、参与者外必要性(16)、認識的モダリティ(17))のトルクメン語への翻訳を依頼し、もし*V-mAll*と*V-mAk(IIk) gerek*のいずれかが現れた場合、もう一方の形式に置き換えた文が許容されるかどうかについても尋ねた。結果を以下に示す。(15)と(16)は、最初にa.の*V-mAll*で翻訳された。そのため、発表者は、それを*V-mAk(IIk) gerek*に入れ替えた文であるb.の許容度をインフォーマントに尋ねたところ、どれも許容された。

(15) 参与者内必要性「よく働くためには、ベゲンチは毎日8時間寝なければならない。」

- a. *Gowy işle-mek, Begenç her gün 8 sagat yat-maly.*  
 good work-VN PN every day hour lie-OBLG
- b. *Gowy işle-mek, Begenç her gün 8 sagat yat-mag-y gerek.*  
 good work-VN PN every day hour lie-VN-3.POSS necessary

(16) 参与者外必要性「夜遅くなったので、ベゲンチは家に帰らなければならない。」

- a. *Giç bol-dy, Begenç öý-e gayt-maly.*  
 late become-PAST PN home-DAT return-OBLG
- b. *Giç bol-dy, Begenç öý-e gayt-mag-y gerek.*  
 late become-PAST PN home-DAT return-VN-3.POSS necessary

(17) 認識的モダリティ「ベゲンチはカバンに物を入れているので、今すぐ家に帰るに違いない。」

- Begenç sumka-sy-na zat-lar-y-ny sal-yp otur-andyg-y için,*  
 PN bag-3.POSS-DAT thing-PL-3.POSS-ACC put-CVB sit-PTCP.PAST-3.POSS for
- basym öý-e gayt-jag-y belli.*  
 soon home-DAT return-OBLG-3.POSS certain

さらに、上記の認識的モダリティの例(17)で*V-mAll*と*V-mAk(IIk) gerek*が引き出せなかったため、両形

<sup>3</sup> 条件形 *-sa* は、*V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* の動詞語幹には直接付かない。そのため、第一の調査では主陳述に仮定が作用する場合については対象外とする。

式を用いて「雨が {(昨日) 降った (18) / (今) 降っている (19) / (これから) 降る (20) } に違いない」を作例し、その許容度を尋ねた。インフォーマントは、*V-mAll* は許容したが、*V-mAk(ilk) gerek* は不自然に感じるとコメントした。

- (18) a. *Ertir*      *yagyş* *yag-maly*.  
tomorrow    rain    rain-OBLG
- b. ? *Ertir*      *yagyş* *yag-mag-y*      *gerek*.  
tomorrow    rain    rain-VN-3.POSS    necessary  
「明日、雨が降るに違いない。」
- (19) a. *Daşar-da*    *yagyş* *yag-yan*      *bolmaly*  
outside-LOC    rain    rain-PTCP.PRS    rain-OBLG
- b. ? *Daşarda*    *yagyş* *yag-yan*      *bol-mag-y*      *gerek*.  
outside-LOC    rain    rain-PTCP.PRS    rain-VN-3.POSS    necessary  
「外で雨が降っているに違いない。」
- (20) a. *Düýn*      *yagyş* *yag-an*      *bol-maly*.  
yesterday    rain    rain-PTCP.PAST    rain-OBLG
- b. ? *Düýn*      *yagyş* *yag-an*      *bol-mag-y*      *gerek*.  
yesterday    rain    rain-PTCP.PAST    rain-VN-3.POSS    necessary  
「昨日、雨が降ったに違いない。」

したがって、*V-mAll* は拘束的・認識的モダリティの両方を表せるが、*V-mAk(ilk) gerek* は認識的モダリティが表しにくいことが明らかとなった。

### 3.2. 形式に注目した調査—作例の許容度調査

まず、*V-mAll* と *V-mAk(ilk) gerek* について *Begenç öýe git-* 「ベゲンチが家に帰る」という主陳述をもとにして下記 10 パターンの用例を作例し、計 20 の例文を用意する。この 10 パターンは、先行研究における記述をもとにしたものに、動詞語幹に時制・否定を表す形式を付したものを足した。その後に、インフォーマントに、これらの作例が許容できるかどうか、許容できるとすればどのような意味を表すのか尋ねた。表 1 に調査結果を挙げる。

- モダリティに後続する例 3 例 (過去 1, 未来 1、否定 1)
- 動詞語幹に付く例 3 例 (過去 1, 未来 1、否定 1)
- 仮定形 1 例
- 疑問形 1 例
- 確認 =*dIr* を後続させた例 1 例
- 証拠性 *eken* を後続させた例 1 例

表 1: 作例許容度調査の結果一覧

		<i>-mAll</i>	<i>-mAk(ilk) gerek</i>	例文
モダリティ に後続する	過去	ok	ok	
	未来	ok	ok	
	否定	ok	ok	
動詞語幹 に付く	過去	ok	×	(21)
	未来	ok	×	(22)
	否定	×	ok	(23)
仮定形		ok	ok	
疑問形		ok	ok	
確認 = <i>dIr</i>		ok	ok	
証拠性 <i>eken</i>		ok	ok	

本節では、非文と判断されたパターンについて例を挙げる。まず、動詞語幹に過去・未来を表す要素が続く例について述べる。(21) は過去時制の例で、(22) は未来時制の例である。それぞれ a. が *V-mAll* の例で、b. が *V-mAk(ilk) gerek* である。どちらも b. *V-mAk(ilk) gerek* は非文と判断された。

(21) a. *Begenç öý-e gid-en bol-maly.*

PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-OBLG

「ベゲンチは家に帰ったに違いない。」

b. \**Begenç öý-e gid-en bol-mag-y gerek.*

PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-VN-3.POSS necessary

(22) a. *Begenç öý-e git-jek bol-maly.*

PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-OBLG

「ベゲンチは家に行くに違いない。」

b. \**Begenç öý-e git-jek bol-mag-y gerek.*

PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-VN-3.POSS necessary

以上により、*V-mAk(ilk) gerek* は主陳述にテンスが作用しないことが明らかとなった。

次に、動詞語幹に否定を表す要素が続く例 (23) について述べる。a. の *V-mA-mAll* の例が非文だとされたが、これは、(3) と (4) で示したように、*V-mAll* のあとに否定小詞 *däl* を続けることで主陳述の否定もモダリティの否定も表せるためであろう。



- (23) a. *\*Begenç öý-e git-me-meli.*  
 PN house-DAT be-NEG-OBLG
- b. *Begenç öý-e git-mezlig-i gerek*  
 PN house-DAT leave-VN.NEG-3.POSS necessary  
 「ベゲンチは家に行くべきではない。」

なお、(23) の b. は「ベゲンチは家に行かないに違いない」という読みはできないとインフォーマントからコメントを得た。

#### 4. 結論と今後の課題

3.1 節の意味に注目した調査では、下記の (18)~(20) の b. に示したように、*V-mAll* は拘束的・認知的モダリティの両方を表せるが、*V-mAk(IIk) gerek* は認知的モダリティが表しにくいことが明らかとなった。

- (18) a. *Ertir ýagyş ýag-maly.*  
 tomorrow rain rain-OBLG
- b. ? *Ertir ýagyş ýag-mag-y gerek.*  
 tomorrow rain rain-VN-3.POSS necessary  
 「明日、雨が降るに違いない。」
- (19) a. *Daşar-da ýagyş ýag-ýan bolmaly*  
 outside-LOC rain rain-PTCP.PRS rain-OBLG
- b. ? *Daşarda ýagyş ýag-ýan bol-mag-y gerek.*  
 outside-LOC rain rain-PTCP.PRS rain-VN-3.POSS necessary  
 「外で雨が降っているに違いない。」
- (20) a. *Düýn ýagyş ýag-an bol-maly.*  
 yesterday rain rain-PTCP.PAST rain-OBLG
- b. ? *Düýn ýagyş ýag-an bol-mag-y gerek.*  
 yesterday rain rain-PTCP.PAST rain-VN-3.POSS necessary  
 「昨日、雨が降ったに違いない。」

3.2 節の形式に着目した調査で *V-mAll* と *V-mAk(IIk) gerek* の間に最も大きな差異が現れた点として、*V-mAll* の前に過去を表す要素を置いた文＝主陳述にテンスが作用している文は許容されたが、*V-mAk(IIk) gerek* ではそのような文は許容されなかったことが挙げられる。(21) と (22) は *gerek* の前に過去を表す要素を置いた文＝主陳述にテンスが作用している例である。どちらの例でも b. *V-mAk(IIk) gerek* は非文と判断されている。

- (21) a. *Begenç öý-e gid-en bol-maly.*  
 PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-OBLG  
 「ベゲンチは家に帰ったに違いない。」
- b. *\*Begenç öý-e gid-en bol-mag-y gerek.*  
 PN house-DAT leave-PTCP.PAST be-VN-3.POSS necessary

- (22) a. *Begenç öý-e git-jek bol-maly.*  
 PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-OBLG  
 「ベゲンチは家に行くに違いない。」
- b. *\*Begenç öý-e git-jek bol-mag-y gerek.*  
 PN house-DAT leave-PTCP.FUT be-VN-3.POSS necessary

以上により、*V-mAk(IIk) gerek* は主陳述にテンスが作用しないことが明らかとなった。2.2 節で挙げた「認識的モダリティ不可侵性の原理」によれば、認識的モダリティを表す英語の法助動詞では、否定・過去・条件が主陳述のみに作用するという (Coates 1983: 422)。この原理をトルクメン語にも援用できるとすると、*V-mAk(IIk) gerek* は、動詞語幹にテンスを表す要素が続かないことから、認識的モダリティを表さないと想定できる。この想定は、(23) の b. に示したように、動詞語幹に否定を表す要素が付く場合に認識的モダリティを表さないことから裏付けられる。

- (23) b. *Begenç öý-e git-mezlig-i gerek*  
 PN house-DAT leave-VN.NEG-3.POSS necessary  
 「ベゲンチは家に行くべきではない。」  
 [*\*ベゲンチは家に行かないに違いない。]*

以上の調査により、本発表は、*V-mAk(IIk) gerek* は認識的モダリティを表せないが、*V-mAll* はどちらも表せると結論付ける。

今後は、トルクメン語と同じ南西 (オグズ) 語群に属するトルコ語・アゼルバイジャン語と、中央アジアのチュルク諸語における必要性を表す形式と比較対照を行いたい。トルコ語・アゼルバイジャン語では、トルクメン語と同源の *V-mAll* を持つ<sup>4</sup>。他方、中央アジアのチュルク諸語では、*V-mAll* は用いられないが、古チュルク語 *\*VN+kergek* に遡る構造 (トルクメン語の *V-mAk(IIk) gerek* に相当) が拘束的モダリティも認識的モダリティも表す (日高 2023: 123-124, 127-128)。この比較対照により、チュルク諸語における必要性を表す形式の通時的変遷を推定できると考えている。

<sup>4</sup> Rentzsch (2015: 139) では、西オグズの言語 (トルコ語・アゼルバイジャン語) の *V-mAll* は、アスペクトとムードの作用域に入らず、意味論の観点からは、直示的に中心的な意識を持つ主体の観点から当該動作を行う必要性や義務を評価する願望法 *-GAY* と *-(y)A* に似ている、と指摘されている。一方、トルクメン語 *V-mAll* は、それだけで現れることも、*bol-* を用いてアスペクトとムードの接辞を受け入れることもできる。また、Mansuroğlu (1959: 173) は、14~15 世紀のアナトリア・トルコ語の *V-mAll ol-* の用例を挙げている (トルコ語の *ol-* はトルクメン語の *bol-* に相当する)。これは、古くはトルコ語でも、トルクメン語と同じように、*V-mAll* のあとに *bol-* を続けられたことを示している。

## 謝辞

本発表は、JSPS 科研費 JP22H00657, JP22KJ1443 の助成を受けたものである。

本発表は、トルクメン語母語話者一名の方からの協力を得て成しえたものである。ここに深い感謝の意を表す。無論、本発表での誤りは、協力者に一切の責はなく、発表者に帰するものである。

## 略号一覧

+		複合語境界	DAT	dative	与格	PL	plural	複数
=		接語境界	EMPH	emphatic	強調	PN	person name	人名
-		接辞境界	FUT	future	未来	POSS	possession	所有
1, 2, 3		123 人称	GEN	genitive	属格	PRS	present	現在
ABL	ablative	奪格	LOC	locative	処格	PTCP	participle	形動詞
ACC	accusative	対格	NEG	negative	否定	Q	question marker	疑問標識
CAUS	causative	使役	OBLG	obligation	義務	RECP	reciprocal	相互
COND	conditional	条件	PASS	passive	受身	VN	verbal noun	動名詞
CVB	converb	副動詞	PAST	past	過去			

## 参考文献

- Baskakov, N. A., M. Ja. Xamzaev and B. Čaryjarov. (1970) *Grammatika Turkmenskogo jazyka. čast' I. fonetika i morfologija*. [Turkmen Grammar. Volume I. Phonology and Morphology.] Ašxabad: Izdatel'stvo «YLYM».
- Clark, Larry (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Coates, Jennifer. (1983) *The Semantics of Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
- 日高晋介 (2023) 「中央アジアのチュルク諸語におけるモダリティ対照の試み」『言語の普遍性と個別性』14: 109-135.
- Jenkins, Lyle. (1972) *Modality in English Syntax*. Doctoral dissertation, MIT. [Reproduced by Indiana University Linguistics Club.]
- Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 風間伸次郎 (2021) 「トルクメン語：特集補遺データ『他動性』『ヴォイスとその周辺』『受動表現』『アスペクト』『モダリティ』『情報構造の諸要素』『否定、形容詞と連体修飾複文』『所有・存在表現』」『語学研究所論集』26: 439-99.
- Mansuroğlu, Mecdut. (1959) Das Altosmanische [Old Ottoman]. Deny, Jean & Grønbech, Kaare & Scheel, Helmuth & Togan, Zeki Velidi (eds.). *Philologiae Turcicae Fundamenta. Vol. 1*. Wiesbaden: Steiner. 161-182.
- Rentsch, Julian (2015) *Modality in the Turkic languages: form and meaning from a historical and comparative perspective*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag.
- Van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology*. 2(1):79-124.